



第84図 出土銭貨・木製品 (S=1/1, 21はS=1/2)

V まとめ (第41表)

平成21～23年度の今福遺跡発掘調査において確認した遺物は、縄文時代～近世までの約54,600点(遺物)に及ぶ。遺構は確認できなかったが、多くの旧河道跡を確認した。今福遺跡は、河川改修以前長年にわたり流路を変遷しながら埋没した今福川旧河道跡とその支流跡で構成され、土層断面は複雑な鱗状堆積を呈する。中ノ瀬遺跡の低丘陵から当該遺跡にかけて岩盤自体が北西方向に傾斜しているため、長年当該遺跡一帯は今福川の氾濫原であったと考えられる。狭く、馬蹄状に三方を山と丘陵で囲まれた当該遺跡の漏斗のような環境においては、短時間でもまとまった降雨量があると河川の流量はすぐに増して激流と化す。その度河道内の遺物は激しいローリングにより新たに割られ、また周囲から様々な時代の遺物も混入するため、当該遺跡の旧河道跡は時代を特定しづらい。しかし、今福川流域が狭く限定された地域であるからこそ、時代を特定できない旧河道跡の埋土に含まれる遺物であっても、地域の歴史的環境を考察するためには有効と考える。

縄文時代については、②区では縄文時代後期、⑥区では縄文時代後～晩期を主体とする遺物包含層を確認した。両所とも各種石器と共に石核や剥片・チップが出土し、石器製作場跡と考えられる。②区は今福遺跡西側の山裾に所在し、今福川の氾濫原に位置する当該遺跡においては比較的安定した環境にある。⑥区は今福川の氾濫原中央に位置するが、当時は安定した環境であったものと推測される。これらの包含層からは、多くの鈴桶型石刃が出土した。また、鈴桶型石刃を素材とする彫器、剥片鑿、つまみ形石器も確認した。彫器は②区を中心にして32点が出土し、ほとんどが鈴桶型石刃を素材とする特異な状況を示す。縄文時代後期の彫器の出土量としては異例であり、鈴桶型石刃を素材利用した石器製作の多様性を拡大させる重要な発見である。両遺物包含層は同時期に存在したが、出土した石器の器種に違いが見られるため、製作する石器の器種により場を使い分けたと考えられる。⑥区遺物包含層では少量ながら弥生時代前期の板付I式土器まで確認した。

弥生時代の今福遺跡出土遺物は弥生時代前期(眞口式)～中期前葉(眞口式)と弥生時代後期後半(眞口式)，隣接する中ノ瀬遺跡の遺物は弥生時代中期前葉(眞口式)～弥生時代後期後半(眞口式)のもので、今福遺跡の欠落した時期を中ノ瀬遺跡が補完している。堅穴式住居など中ノ瀬遺跡の遺構は東部の低丘陵に集中するが、冬場の強い季節風(北風)が真面に当たる場所で生活環境として適さず現在人家はない。今福遺跡出土遺物の供給源と考えられる遺跡の西側山麓は、山が北西風の障壁となり生活環境として適している。そのため当該地域における人々の生活の場は当初的、基本的にこの地区で営まれたと考えられる。但し、当該地域は地滑り地帯で度々大災害に見舞われており、この地区も地滑りのリスクが伴う。時代は不明だが現在も山肌に所々大きな地滑りの痕跡が残る。弥生時代中期前葉に地滑りが起り、やむを得ず弥生時代後期前半まで中ノ瀬の丘陵に生活の場を移し、再び今福遺跡周辺に戻ったものと推測される。中ノ瀬の丘陵はその後古代末まで、ほとんど人の活動は感じられない。

古墳時代～古代の遺物では、多くの旧河道跡から4世紀後半～11世紀の土師器・須恵器・黒色土器が出土した。須恵器は壺・甕・壺、土師器は高杯・壺・鉢・塊などが多い。これらは供膳具(禮器)・容器(禮)であり、水神への供進や直会に使用されたものと思われ、今福川の氾濫原では水害を起こす荒御魂を鎮める水辺での供祭が綿々と行われていたと推測する。また須恵器などの器種・質などから、

これらの時代には相当な力を持った在地勢力の存在が窺える。②区のSR-2からは12世紀後半～13世紀前半を中心とした土師壺・皿がまとまって出土した。SR-2埋没過程末期の小さな沼に破棄されたと考えられる。祭祀等に使用したものか、近隣の施設に関連するものか判断できない。SR-2は地滑り跡の際にあり、近隣の施設はそれにより失われたとも考えられる。

古代末～中世に関しては、10世紀～13世紀前半の白磁(顧神心)，越州窯系青磁(創・日神心)，龍泉窯系青磁(紅神心)，同安窯系青磁(筆・日神心)，高麗陶磁などの貿易陶磁器が308点出土した。越州窯系青磁が多いのが特徴である。出土量は12世紀後半以降急減する。隣接する中ノ瀬遺跡では、白磁(緋・匂，匂神心)・龍泉窯系青磁(創・匂，匂神心)，同安窯系青磁(筆・匂神心)，高麗・朝鮮系陶磁器(森本・片山形V形V形)など1,916点が出土した。中ノ瀬遺跡の貿易陶磁器は、丘陵部に11世紀末から現れ12世紀後半～13世紀前半をピークに13世紀後半以降減少する。また滑石製石鍋は今福遺跡では11世紀の縦耳型だけ出土し、中ノ瀬遺跡では12世紀後半以降の鍔付型を主とする。一般的に西北九州では、12世紀後半以降宗家松浦氏が台頭、13世紀に入ると平戸松浦氏も本拠地を小値賀島から平戸島に移して勢力を拡大していくと考えられる。これらの遺物出土状況は、10世紀には今福遺跡西側山麓に古墳時代以来の在地勢力が支配する公的な港湾・官衙施設が存在して中国との交易も行われたが、12世紀後半それに替わる新たな交易拠点が宗家松浦氏により中ノ瀬の丘陵部に成立したことを示し、当該地域における古代から中世への転換を具象していると考える。現在も中ノ瀬の丘陵先端には同氏と関係が深い今福神社(緋)が鎮座する。さらに中ノ瀬遺跡と同じく対中国交易の拠点であった佐世保市門前遺跡を比較すると、中ノ瀬遺跡は貿易陶磁器の出土量において門前遺跡を凌駕する。しかし、門前遺跡は県内最多の越州窯系青磁(日神心)の出土量で圧倒し、緑釉陶器25点なども出土していることから、その周辺は10世紀には彼杵郡の「郡津」、11世紀後半～12世紀前半には畿内産瓦器塊(縦型瓦76点、横型瓦80点)の出土量などから摶闇家領彼杵荘の「外港」として栄えたと考える。門前遺跡出土貿易陶磁器の年代は10世紀・11世紀末～13世紀前半であるが、12世紀後半以降出土量は減少、13世紀後半以降は確認できない。滑石製石鍋はほぼ全てが縦耳型である。これらのことから、12世紀後半以降門前遺跡周辺での対中国交易は宇野御厨執行職宗家松浦氏の海上支配下で衰退、同氏の拠点である中ノ瀬遺跡での交易が発展したが、13世紀に入り平戸松浦氏が小値賀島へ平戸島一帯の海上支配を確立、交易ラインが小値賀島→門前遺跡周辺から小値賀島→平戸島に換わり、13世紀後半以降門前遺跡周辺の交易は途絶えて中ノ瀬遺跡の交易も衰退したと推測する。高麗・朝鮮系陶磁器は門前遺跡では少ないが、中ノ瀬遺跡では15世紀後半～16世紀前半を中心とした147点が出土し、これまで県本土部で最多出土した櫻形窯遺跡の64点を遥かに凌ぐ。15世紀後半宗家松浦氏松浦盛は本拠を現佐世保市相浦地域に移す一方、「受図書人」として盛んに朝鮮と交易した記録が残るが、その一端を示すものであり、同氏は対中国交易の衰退に対して朝鮮との交易に新たな活路を見出したと考えられる。

基本的に今福遺跡と門前遺跡の出土遺物の動向には共通性が見られる。松浦市教委の調査では今福遺跡でも緑釉陶器が確認されている。両遺跡とも、律令制とその後の荘園制下において中央の権威に依存した、古代以前の在地勢力の拠点という性格付けで間違いないであろう。

遺跡名	白磁	越州窯系	龍泉窯系	同安窯系	緑・白磁	合計
今福遺跡	213	37	38	5	15	308
中ノ瀬遺跡	518	1	1,227	23	147	1,916
門前遺跡	594	160	88	14	8	864

第41表 貿易陶磁器出土状況比較（数字は破片点数）

(今福遺跡の点数は平成21～23年度調査出土分)



②区縄文時代遺物包含層（Ⅲ層）遺物出土状況



⑥区縄文時代遺物包含層（IV b層）遺物出土状況

図版I ②・⑥区縄文時代遺物包含層遺物出土状況